ハンカチ

ナッシング・レディ・トゥ・ノー

井手貴弘

人　物

小野野ノ木（20）　無職

警　官

婆

○美術館・展示室1・内（夜）

展示室に並ぶ印象派の絵画。そのなかに1枚のモネの絵。

呆れた様子の警官。

警官の目の前に、壁にぶつかってなお壁に向かって歩き続ける小野野ノ木（20）がいる。

警官「ちょっと、お兄さん」

と小野の肩を叩く。

轟音とともに建物が激しく揺れる。

驚いて警官が振り向くと、大型トラックが壁を突き破って炎上している。

けたたましい警報音。

スプリンクラーが作動する。

床に散乱する絵画。モネの絵が燃えている。

小野が虚ろな瞳でモネの絵を見つめる。

小野「燃える。モネが燃える」

突如小野が正気付き、辺りを見渡す。

燃えているモネの絵に近づき、ポケッ

トからとりだしたハンカチで火を叩き消し始める。
と、ふと小野が手を止めて、ハンカチを目の前に広げる。
幼児向けアニメのキャラクターがあしらわれたハンカチには、赤黒い字で大きく「ニゲロ」と書かれている。
わらわらとスタッフが集まってくる。、
小野、恐る恐る周囲を見渡しつつ、モネの絵からじりじりと遠ざかる。
トラックが爆発する。人々の悲鳴。
小野が走り出す。

○同・展示室2・内（夜）

小野が、さまざまな絵画の展示された無人の館内をひた走る。
小野の声「あの絵、あの絵はモネだったのか。なぜおれは、あれがモネだと分かったんだ。おれはモネを見たことがあるのか。それから――」

小野が展示室を出ていく。

○同・外（夜）

小野が重そうなドアを開けて出てくる。
膝に手をついて呼吸を整える。
周囲は木々に囲まれてひっそりと静まりかえっている。

小野「それから、これだ」
とハンカチを取り出す。
ハンカチに「イエ」の文字。

小野「さっきはカエレと書かれていた……いや、ウセロ？トラック？何だ、何て書かれてた？どうなってる？そもそもこれは俺のものなのか？」
どこからかアオサギのけたたましい鳴き声。
小野、執拗に辺りを見渡し、足早に歩き出す。

○住宅街・道（夜）

小野が歩きながらポケットを探っていると、ガラケーが出てくる。

小野「スマホ！スマホか！」

小野が歩きながらガラケーの画面をタップしたりピンチしたりしている。

ガラケーは反応しない。

小野「クソ！」

小野が指先を舐めてもう一度ガラケーの画面をタップするが無反応。

ハンカチを取り出して画面を拭いてからタップするも無反応。

婆の声「お兄ちゃんそれガラケーや」

小野が振り向くと婆が立っている。

小野「何？」

婆「ガラケーやて。画面触ってもいごかへん

小野「何、ガラケーって」

婆「ガラパゴスケータイや。知らんのか！ガラパゴスゆうたら東太平洋上の赤道下にあるエクアドル領の諸島。イスラスガラーパゴはゾウガメたちの島々という意味で——

と平板な調子で滔々と話し続ける。
小野が婆の足元に視線を落とす。
婆は素足にゲートルを巻いている。
小野がハンカチを見ると「タチサレ」
と書かれている。
小野が振り返った瞬間、走ってきた自
転車と接触して倒れこむ。
宙を舞うハンカチ。道路に落ちる。
小野が上体を起こして道路に落ちたハ
ンカチを眼にし、ぎょっとする。
真っ赤な外車が飛ばして来て、ハンカ
チを轢く。

小野「あぁーっ！」

と急いで起き上がり、ハンカチに向
かって駆け出す。
まっ黄色な外車が小野にむかって走っ
て来る。
小野、間一髪ハンカチを拾いあげ、車
を避ける。
ハンカチを点検すると、くっきりとタ

イヤ跡がついている他に問題はない。

小野「これは命綱なんだな？轢かれる危険を犯してでも守る必要があるんだな？そういうことだな、婆さん！」

婆は相変わらず淡々と声を発し続けている。

小野の眼の前でバスが停まり、乗降口が開く。

小野が周囲を見渡すが、バス停はない。

ハンカチを見ると「bas」とある。

悩まし気な小野。

停車しているバスが動き出す。

道に小野の姿はない。

○走るバス（夜）

小野がガラケーで「俺の家」と検索すると地図が表示され、ピンが一つ表示されている。

運転席に近づいていく小野。

小野「ここまで行ってくれるか」

とガラケーの画面を示す。
運転手が横目で画面を見て、むっつりとうなずく。
小野が近くの席にどっかと腰を下ろす。
車内のモニターに眼をやると、「今日という良き日を振り返りましょう。それが幸福に至る道です。」とある。
小野が目を瞑る。
小野の声「今日俺は……」

○アパート・小野の部屋・内（朝）
テーブルにベーコン、目玉焼き、サラダの載った皿。
それらを食べる小野。
＊　＊　＊
姿見の前で着替えている小野。

○道（朝）
自転車を漕いでいる小野。

○大学・講義室・内

ノートをとっている小野。

隣に座った女性がじっと小野を見つめている。

小野と女性の眼が合い、同時に微笑む。

○美術館・前（夕）

小野と女性が腕を組んで歩いている。

○走るバス（夜）

何も書かれていないハンカチ。

ハンカチを見つめる小野。

窓外を一定の間隔で電灯が過る。

小野の声「思い出せる。ありありと。だがなぜ思い出せる？他のことはなにもかも曖昧なのに。あの女は誰だ？このハンカチの持ち主か？このハンカチの持ち主がわかれば俺は幸福か？」

窓外を見つめる小野。

その手はハンカチを使って手品をして

いる。
いつの間にか小野の前に子供が三人
しゃがみこんで手品を見守っている。
ハンカチが小野の手から消え、現れ、
消え、現れ……。
そのたびに子供たちが小さく拍手をす
る。
アナウンス「ご乗車ありがとうございました。
俺の家、俺の家でございます。レディズエ
ンドジェントルメン。ウェルカムトゥザバ
ス。ジスイズザノゾミスーパーバス……」
我に返る小野。
手にはハンカチがない。
目の前で子供が握りしめた拳を開くと、
ハンカチがある。
小野がひったくろうと手を伸ばすが、
その前に子供がハンカチを口に含み飲
み込んでしまう。
にんまりと笑う子供。
バスのドアが開く。

小野、子供の口に思い切り手を突っ込む。
子供の喉が膨らむ。子供は白目を向き、喉からはごぼごぼと音が鳴っている。
残り二人の子供はじっとその様子を見守っている。
バスのドアが閉まる音。
小野「待て！降りる！降りる！」
子供の喉に腕を突っ込んだまま子供を抱え上げ、ドアまで運んでいく小野。
二人の子供が小野のあとをついていく。
小野が閉まったドアを蹴りつける。
小野「開けろ！」
と執拗にドアを蹴る。
腕が子供の口から抜けていく。
その手には大量のハンカチが握られている。
ゆっくりと手を離すと、ハンカチが塊になって床に落ちる。
小野の背後で、ゆっくりとドアが開く。

733-0003

広島県広島市西区三篠町 1-5-6

HOXTON CLUB 401

井手　貴弘